
僕の現実逃避

宮原葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の現実逃避

【Nコード】

N7293K

【作者名】

宮原葉月

【あらすじ】

俊兄から貰った麦茶（魔法が掛かった）を飲んだ僕（亜耶）は気を失って、目が覚めると自分が女になっていることに気付く。

でも、その俊兄が本物じゃなくて――？

僕はいったいどうなっちゃうのでしょうか？

※あらすじを変更。

★30日～2か月の間に次話を投稿する予定です。

↑予想外の高校生活のためあけました。

★感想，評価，お気に入り登録で作者の作成意欲が燃えます！

プロローグ／全ての始まり／

僕の両親はどちらも共働きで、僕たちを置いて海外で仕事をしている。

お金には困っていない、両親が仕送りとしてお金を送ってくるからだ。

家族構成は、父、母、俊、亜耶あやの4人家族だ。

ちなみに、名字は『桐原』だ。

「はう、暑い」

つい先日エアコンが壊れてしまって、仕方なく窓を開けて扇風機で暑い空気を逃がしているのだが、

逃がしきれずに部屋の中に暑さが残ってしまって僕はバテていた。冷たい麦茶を飲んで身体の熱を冷まそうと思い

「俊兄。麦茶ちょうだい」と僕は兄さんに麦茶を入れるようお願いをする。

「ほら、亜耶」兄さんに頼み事をするすぐやってくれる。

「ごくっ…ごくっ…いや、麦茶は美味しいね！」その時だった。

身体が冷えたと思ったら、身体が熱くなってきたのだ。

「うっ、身体が…熱い…」僕は魔法かなと思いながら気を失った。

気が付くと、夜だった。——飲んだのが朝だったから12時間経ったのかな？

僕は起きあがろうとすると、ある異変ことに気付いた。

胸が膨らんでいる？僕はそれを触ってみる。

「んっ…」柔らかいなあと簡単な

僕は、はっ！として急いで股間を触る。

「無い!？」俊兄かな？魔法とゆうか呪いをかけた人は。僕は冷静に今の状況を把握する。

突然足音が聞こえた。今まで防音魔術でもはっていたのだろうか。

「俊兄。魔術：この場合魔法かな。それを使って僕に何をしたわけ？
この術式は複雑で、さらにプロテクトをかけている。僕に対するい
じめと受け取っていいかな？」

僕は俊兄を睨む。

「これは亜耶の試練だよ。その術式とプロテクトを破壊してみろっ
てゆうね」俊兄―いや”何者か”がそう僕に言う。

（俊（兄）視点）

「俊兄。魔術：この場合魔法かな？ それを使って僕に何をしたわ
け？」

この術式は複雑で、さらにプロテクトをかけている。僕に対するい
じめと受け取っていいかな？」

亜耶は俺を睨んできた。

「これは亜耶の試練だよ。その術式とプロテクトを破壊してみろっ
てゆうね」

咄嗟にしまかせを言う俺。ばれてないよな？

（僕（亜耶）視点）

「これは亜耶の試練だよ。その術式とプロテクトを破壊してみろっ
てゆうね」

俊兄は古代は使えないはずなんだよな。いつ入れ替わったんだか。
でも……

「頑張ってみるよ。おやすみ」

しばらくは”何者か”の手の上で踊るとしますか。

僕はそんな事を思いながら自分の部屋に行きベッドにダイブした。

僕は意識を自分で落とした。

プロローグ～全ての始まり～（後書き）

加筆。

1話

窓から日射しが入ってきて、眩しい。

僕は、仕方が無いので起きた。

あれが夢でありますように。

僕は下を見た。

「はぁ………」ため息が出た。

「夢じゃないのか……」

僕は鏡の前に来て自分の姿を見た。

んー。可愛い。これが僕じゃなかった——らなんて思えてしまうくらいの美少女になっていた。

僕は、思わず見惚れてしまう。

「おー亜耶ー入るぞ！」俊兄の声だ！！鏡の前じゃまずい！

扉の開く音が聞こえ振り向き、間抜けな声を僕は出してしまった。

「えっ？」逃げようとしたが完全に見られてしまった。

「おはよう、亜耶。今日、母さん帰ってくるから」と俊兄は言い終わると僕の部屋から出ていく。

僕は唐突に体が抜け、床にぴたりと座り込んだ。

（はぁ……。神様これから僕はどうすればいいのでしょうか？）

僕は神様に問いかけるが、返事は返ってこなかった。

「俊、亜耶ただいまぁ！」母さんの声だ。どうすればいい！？

僕の頭の中では、2つの行動が出ている。

1. 逃げる

2. 隠れる

だめだ。どちらも上手くいきそうにないや。

「亜耶ちゃん、開けるわよ！」

僕は、急いで布団に隠れる――がすぐに見つかってしまった。

「俊から聞いたけど・・・可愛くなったわね」

それ（俊）は本物じゃない。何かが化けているんだ。

母さんは気づいていないようだけど。

「……………」

僕はこの家に居るのが嫌になって財布と携帯電話を持って飛び出した。

飛び出す時に”偽物”の俊兄とお母さんが騒いでいたが無視した。

〳〵公園〳〵

僕は一人、近所にある公園に居た。ブランコに乗って足で動かしている。

「はぁ……。飛び出してきたのは、良いけど…これからどうしよう」

僕はひとまず友人に泊まらせて貰うために友人の家に向かうためにブランコから立ち上がり歩き出した。

1話（後書き）

雪雅です。

今回は1話の執筆に時間をかけすぎました。すみません。
ここから、言い訳です。

中学3年になり、修学旅行関係、勉強、中総体の練習。で忙しいんです。

修学旅行関係はひと段落しましたが、勉強と中総体にむけての練習がやっかいなのです。（特に中総体）
まあ、言い訳はここまでにしておきます。

次話ですが、投稿遅れそうです。すみません。。。

29日 修正。文字数が減っている……。

2話

僕は今、チャイムを鳴らして友人を待っている。

実はパジャマのまままでいたりする。だって起きてすぐ家出てきたんだもん。

「あゝ、ごめん。今開けるから：誰？」

友人の皐月 晃平は友人である僕に冷たい言葉を放つ。

まあ、仕方がないか。容姿が男の時より変わってるし。

「僕だよ！桐原 亜耶だよっ！」

友人・晃平は顔をしかめた。

「たしかに、友人にはそうゆう名前の人は居るけど……」

「それが僕なのっ！ この前ラノベ貸したでしょ！」

「うーん。あれか！？ 朝起きたら女になっていたか？」

晃平は馬鹿で助かるよ。

「そうなんだよ……。お願いがあるんだ、泊めてちょうだい！」

僕は晃平に頼んだ。上目遣いを駆使して。

「ああ、いいぜ！！」

作戦成功だ！

「ありがとうっ！」僕は思わず晃平を抱きしめる。

「おい！ 亜耶それは困る。……嬉しいんだが」

晃平は僕を無理やり離れた。

ああ、そうか僕”女”になってるんだっけ。

「じゃあ、上がらせてもらおうよ」僕はそう言い晃平の部屋へ向かった。

「ちょっと、待てっ！ 今散らかってるから……」

「いつもでしょ！」

扉を開けると案の定、散らかっていた。

「僕が掃除してあげよっか？」

「いつも助かるよ！」 晃平は僕が遊びに来るといつも掃除をさせている。

まあ、掃除するの好きだしいいんだけどね。

「掃除機持ってきてね」と言うと、すぐに「了解！」と返事が返って来てすぐに掃除機を持ってきた。

「ありがと。じゃあ、待っててね」と言うと僕は掃除を始める。

僕は鼻歌を歌いながら掃除をしていると……過激な本を見つけた。エロ本と言う品物だった。

「きゃー！」と僕は男らしくない声を出してしまった。

そうなのだ、ライトノベルは大丈夫でもエロ本には耐性が無いのだ。

「どうした！？ 大丈夫か……」 晃平は僕が持っている本を見て焦っているようだ。

「ほう、その本を見つけるとは！」

僕は顔を真っ赤にさせている……と思う。

「もっと、マシな場所に隠しておいてよねっ！」僕はそう言い、深呼吸をしてから掃除を再開させた。

~~~~~掃除中~~~~~

「終わった〜！」

「ありがとな、はい：りんごジュース」晃平は僕にりんごジュースが入っているコップを差し出す。

「ありがと：ごくっ：やっぱり、りんごジュースは最高だね」

僕はジュースを一口飲むとコップをテーブルに置いた。

「相変わらず、子供だな」

「子供じゃないよ？」

「そうかい。それで亜耶は今日俺の家に泊まるんだろ？」

「うん、そうするつもりだよ」

「じゃあ、俺の部屋を使ってくれ」

「晃平はどうするの？」

「ソファで寝るから」

「そうなんだ？」

「それと、ほらよ」 晃平は僕にパンを投げた。

「ありがとっ、晃平！」 僕は晃平にお礼を言うのとパン（メロンパン）を食べた。

僕は、メロンパンが好物で上機嫌になった。

「さて、今日は親帰ってくるのかな？」

「いや今日は帰ってこないぞ」

「じゃあ、相談終了！！泊めてくれてありがと晃平！」

「いや、言っていないから！？」

「拒否権はないのだよ」 晃平君「僕は晃平を見て笑う。

「分かったよ……」 晃平は折れたようだ。

「じゃ、買い出しに行ってくるね」と言い僕は術式を構成した。

くくく 晃平の家の玄関前くくく

「使いたくないけど魔術を使いますか。」僕は独り言を言った。

そう、この世界は魔術を使えるのだ。亜耶は他人に魔術を見られるのが嫌なのだ。

だから学校も普通の学校に通っている。晃平は僕が魔術と魔法を使えるって事を……知っている。

それ以前に晃平も魔術を使えるのだ。

おっと、回想が流れたようだ。

僕は、デパートにワープした。

くデパートく

「着いた」

このデパートは魔術を使える人，エリート，魔術組織の人は優遇されるのだ。

一番優遇されるのは組織に入っている人間でなんと無料だ！

エリートは、80%割引で魔術を使える人は50%割引だ。

僕は、組織の人間でもあるから無料で買う事が出来る。

このデパート儲かってるのかなと思ったりする。

・・・

・・・

・・・

「買い物しゅーりょ！」

今日の夜ごはんは冷やし中華に決定だあ！

「さて、とりあえず組織に顔を出すかな」

僕はワープした。

〓組織〓

「ども。認識番号2123 桐原亜耶です。一応提督です」

うわ、周りから・・・特に警備兵から殺気が。

警備兵・・・術式の構成遅すぎる。

「いつも言ってるけど…遅いよ？」

僕は魔術で寝せた。

「警備兵をいつものところをお願いね？ 由美さん」

僕はそう言うのと提督室に向かった。

「ちょっと困りますっ！ 民間人がここに来るなんて！」

「はあ…提督、認識番号2123 桐原亜耶…俊兄の魔法の効

果によってこうなっている」

「すみませんでしたっ！」部下は僕から逃げるように自分の持ち場に戻った。

提督室へ

「来ても何もする事無いや……」

「提督殿、久しぶりの出勤ですな。」

「そうだね。じゃ、僕帰るからかわりにやっておいてね。これは命令だから。じゃ！」僕はそう言い残すと晃平の家に帰った。

……再び晃平の家へ

「ただいま」

「亜耶、おかえり」

僕は食材を個人空間から取り出し冷蔵庫にしまった。

「まだ、夕飯の時間じゃないから少し寝るね」と晃平に言いソファに横になった。

晃平へ

亜耶、本当に寝てるし。これなら探知サーチを使っても気づかれないな。

俺は亜耶に近づき肩に手を置いて探知サーチを使った。

「複雑な術式に強力なプロテクトだな……」

「晃平も同じ結果なんだ」俺はその声に驚く、だって寝ている”はずの”亜耶の声だから。

亜耶へ

僕は肩を手を置かれたので目が覚めた。晃平が探知の術式を構成しているのが分かっていてから寝たフリをしている。

「複雑な術式に強力なプロテクトか……」僕が探知を使ってみてもさうゆう結果が出た。晃平もだから……

僕は目を開けて「やっぱり？」と言った。

晃平は驚いているようだ。

「これでも……少しはプロテクトを解除したんだよ？」と僕は付け足

す。

さすが、俊兄だ。

「お前が解けないプロテクトってどんだけだよ!？」

「俊兄よりは下だけどね」

そして無言の時間がやってきた。

1分。何も言わない。

10分。何も言わない。

「それより、夕飯にしょっか？ 作ってくるね。」と言い残しキッチンに立った。

僕は鼻歌を歌いながら調理をしている。といっても野菜とか切ったり麺をあげたりしているだけなんだけどね。

あつ、勿論スープも作ってあるよ？

よし、後は皿に盛るだけつと。

僕は手際よく皿に盛る。よし完成つと

皿をおぼんに載せてダイニングに行った。

「晃平、出来たよ」と言い、皿をテーブルに置いた。

晃平は箸を持ち「いただきます」と言ってから食べ始めた。

「いただきます」僕も食べ始めた。

うん、おいしい。今日も成功!!

「ごちそうさま」相変わらず晃平は食べるの速いな。

晃平は僕の食べる様子を見ている。まあ、いつもだから慣れたけど。

「ごちそうさま：プロテクト解除するの一緒に手伝ってくれないかな」

「いいぜ。この皐月晃平 魔術組織・認識番号2124・提督が手伝うぜ!!!」

「ありがとう。晃平」僕は笑顔で感謝の言葉を言った。

（晃平視点）

「ごちそうさま。：プロテクト解除するの一緒に手伝ってくれないかな」やっとな食べ終わったか。手伝ってやるか。

「いいぜ。この皐月晃平 魔術組織、認識番号2124：提督が手伝うぜ！」

「ありがと：晃平！」亜耶は笑顔で言ってきた。ドキッとしたのは内緒だ。

「ああ、明日やるから今日は早く寝ようぜ。風呂、先に入るの俺でいいか？」

（亜耶視点）

「ああ、明日やるから今日は早く寝ようぜ。風呂、先に入るの俺でいいか？」

ああ、ここ晃平の家だし

「いいよ」と言った。

晃平は無言で風呂に行った。

さてと、俊兄よ。”ここ”に居るのはわかってるんだよ？

僕はこの部屋全体に結界を張り、攻撃魔法を放った。

「不法侵入だよね？ 俊兄？」

爆風が部屋全体に広がった。テーブル等が壊れていたが結界を解くと治るので無視。

「いつから気づいてた？」

「最初から。僕が料理を作ってる時から。とりあえず俊兄は帰って！！」

僕は攻撃魔法を乱射した。

「分かったから、やめて！！ ぐわあ！！」俊兄は消えた。ワープでも使って家に帰ったのか。僕には関係ないことだけどね。

僕はため息をついてから結界を解いた。

「亜耶、出たぞ そうだ結界と攻撃魔法使ってみただけど、どうしたんだ？」



「害虫を追い払うためにね。僕、入ってくるから!!」  
俊兄

僕は無言で着ている服を脱ぎ、風呂場に入りシャワーを浴び体を洗い湯船に入った。

「ふう〜」癒される。やっぱり日本人はこうじゃなくちゃ!  
20分は経ったかな?僕は風呂場から出て、持ってきた替えの服を着てダイニングに行った

「出勤命令が届いた」晃平は深刻そうな顔で僕に告げた。  
「誰から?」

「元帥から」

ちっ、俊兄め!!

「よし、早く行って疫病神ごと倒さないと僕に平和が!!」  
俊兄  
行くよ  
晃平っ!!

「ちなみに異世界らしい。次元嵐に気をつけて行こう。ちなみに転移は俺するから」

「わかった。じゃあ、よろしくね」僕はそう言い晃平にくつついた。

「座標固定完了。転移式に異状なし。転移開始」

僕と晃平は次元の狭間に出た。

様々な力が満たされている。僕はその力を防ぐために結界を張った。  
晃平の分も張ったよ?

「そろそろ着くぜ」

「うん」

〜俊視点〜

「俺だけだときつか・・・そろそろ弟が来るんだが」  
俺の魔力もそろそろ底なんだが。。

と思ってるの良いタイミングで弟が来た。

（亜耶視点）

「俊兄は自分の事過信しすぎなんだよ：馬鹿が」

「お前は誰？」うん、本物か。

「自分の弟の顔を忘れるなんて酷いんじゃない？」

僕は、呆れながら言う。晃平は無言で僕を見ているし早く終わらせるか。

「・・・」

「まあ、その話は終わったらでいいから。今はこれを全滅させればいいのかな？」

「ああ。」

「晃平やるよっ！」

「わーてっるよ！！」

僕は大規模撲滅魔法を放つ！！

晃平は防御魔法。

周りは一気に砂と化した。

「任務完了！」僕は笑顔で言った。

「あれ使わなくても良いと思うが」

「そうだけどさ。ストレス発散しないと」

僕は間を開け兄の目の前に立つ。

「俊兄よ。この術式とプロテクト解いてもらおうか？」

「俺には身に覚えがないのだが」

「いや、関係あるから。俊兄の形をしている時点で関係ありだからね」

「...？」

「おととい、俊兄の形をした悪魔が僕に性転換魔法をかけた。その悪魔は今でも”家”に居る。僕はそいつを倒して強引に解く！！」

俊兄も協力してくれるよね？」

「状況は分かった。」

「だめ？」やりたくないけど、僕は瞳に涙を溜め、上目遣いで俊兄

を見る。

「協力するからやめてくれ!!」

（晃平の家）

「それにしても疲れた」

「いやいやあれは!？」 晃平は言うのを途中でやめた。  
僕が睨んでるからかな？

「倒すには魔力が必要だな。おやすみ」 俊兄はそう言うソファに横たわって寝た。

「晃平と僕はリミッターはずそうね？」

「それは……」

「ちなみに、拒否権ないから」僕は言いリミッターに強引に魔力を流す。

僕のリミッターは、砕けた。

僕は晃平のリミッターに手を置き”少しの”魔力を流した。  
パリンッ!!と言う音が聞こえ床に落ちる。

「おやすみ晃平」僕はそう言って、晃平のベッドで寝た。

「俺のベッドがあああ!？」と叫び声が近所に響いたが寝ている本人（亜耶）は防音魔法を張っているので聞こえなかった。

仕方が無く、亜耶の隣で寝たのは言うまでもない。本当だよ？

## 2話（後書き）

どうも、『雪雅』改め『宮原葉月』です。  
皆さんはどの辺が変わったか分かりますか？

まあ、それは置いて。

この小説、「僕の現実逃避（仮）」を読んでくださりありがとうございます。  
ざいます。

3話の方ですが、前書きに更新履歴と『とある作家さん』とのお話を載せたいと思っています。では、頑張って執筆しますのでしばらくお待ちください。

6／8 執筆完了。

6／20 改稿。

7／17 改稿。

9／29 改稿。

### 3話（前書き）

お待たせしてすみません。

ようやく3話執筆終わりました。

皆さんが楽しんでくだされば幸いです。

7／17 改稿。

### 3話

（亜耶）

良く寝た。このベッドもなかなかだったな。

「はふぁ」僕は背伸びをしながら欠伸をした。手を下した時、何かにぶつかった。

何だろう？と僕は思った。

僕はそれを見てみた。――晃平だった。

「晃平、おはよう」

「ん？ おはよう」晃平は朝に弱いんだよね。

「悪魔を倒しに行こうか」

僕は笑いそう言った。

悪魔を倒してこの魔法（本人はそう思っている）を解いてやる！！

さてと、晃平に言ったから次は俊兄かな？

僕はそう思いながら俊兄の寝ているリビングに向かう。

「俊兄。おはよう…？」僕は驚いた。

だって……………あの”俊兄が、もう起きているんだよっ！

「亜耶か… おはよう」

「なぜ、起きている？」僕は疑問を口にした。

「たまには、自分で起きてみようと思ってさ…………やめてくれ！ 魔法放たないでっ！」

「いつも、そうやって起きてよ！」はぁ。今までの苦労は一体なんだったんだ…。

僕はそう言くと、朝食の準備をするためにキッチンに立った。

（…？…）

私は、魔法人形。品番は『RITA-000-P』プロトタイプ（試作機）名称は『リタ』です。

魔法人形とは人の情報（能力等）などを<sup>インプット</sup>入力して、造った人が思うままに<sup>オリジナル</sup>情報の持ち主の能力を使うという目的で造られるのが殆んどです。

私もそうでしたが、なぜか廃棄されてしまいました。

私の使命は2つ。オリジナルの抹殺。オリジナルとの接触。ですが、廃棄された私には前者は必要ない（と思います）ので消去。さてと、オリジナルとの接触をしますか。

私はオリジナルの魔力波と精神波データを参照して、オリジナルの居る場所に向かった。

（亜耶）

はあ、僕のデータの魔法人が近付いてきているし。

「晃平、俊兄。出来たよ」僕は二人に料理が完成した事を伝える。

「ああ。それより「わかってるよ」」僕は俊兄の言葉を途中で止めさせた。

「手、出さないでね」と釘を打って置く。

僕は自分で作った料理を急いで食べて”来訪”を待った。

（リタ）

きっとオリジナルは私の存在を知っているのでしょう。魔力波が微妙に変わったから。そして私に向けられているのだから。

「ここですね」私は家の扉を開けた。

（亜耶）

ぎい！ドアが開く音だ。

「ちょっと、遅いんじゃない？……！？」僕は自分の目を疑った。

だって、女の子で、僕の好みのだ真ん中だから。

なんてデータを元に行っているんだ！！　組織を潰してやる！

「君が僕の魔法人？」僕は魔法人形とは言わない。人間なのだから。

「はい、私は『R I T A－O O O－P』プロトタイプ。『リタ』です。」

「はい、ストッププッ！！　品番はこれから言わないでね。同じ人間だから人間らしく生きよう！」僕は笑顔でリタに言う。

「はい、わかりました」

「それで、僕に用？……場合にによっては」僕はそう言い、殺気を一瞬だが出した。

「命令には抹殺とありましたが、廃棄された私にとってはどうしてもいい命令です。私は自分の意思で会いに来ました」とリタはそう言いニコリと笑う。

「そうなんだ」

「はい。ちなみに『R I S A－S』・『リサ』が私たちを狙っています。ちなみにもう近くにいますよ？」

「えっ？」

ドーン！と魔力弾を撃ってきた。

「嘘でしょ！？」と言いながら僕はバリアを張って防ぐ。

「プロトタイプ。命令違反なのでは？」

「うるさい！　リサ、今の私はリタです！」とリタは言いながら『R I S A－S』に魔力弾を放つ。

「っ！」『R I S A－S』は舌打ちをして、バリアを張ってそれを受け止めた。

この娘達は僕の魔法人だ。オリジナル権限を使ってやめさせることが出来る。

でも、僕はその権限をなるべく使いたくないので、仕方が無く魔力弾を二つ作り二人に向けて放った。



（リタ）

「プロトタイプ。命令違反なのでは？」と『R I S A—S』が私に言うが、

「今の私はリタです！！」と私は言いながら『R I S A—S』に魔力弾を放つが、バリアで守られて攻撃が通じなかった。

次の術式構成をしていたが、オリジナルが魔力弾を2つ作り私たちに向けて放ってきた。

私は、バリアを張ろうとしましたが、オリジナルなので、それを避けた。

（亜耶）

僕の放った魔力弾はリタは避けたが、リサはバリアを張って守ろうとしたみたいだ。

しかし、リサのバリアは呆気なく壊れてしまった。

「亜耶うるさいぞ！」 晃平だよ。早く終わらせないといけないな。

「戦闘行為を続けるつもりなら容赦しないよ？」と僕はリサに言った。

「わかりました。オリジナル。」

「亜耶。それが僕の名前だから」と二人に言う僕。

「リサ。組織に戻りなさい」とリタは言った。

その言葉を聞いたリサは組織に戻って行った。

「ふう、疲れた。リタ、僕に付いてきて」

「はい」

僕達は居間に行った。

「晃平。うるさかった？」

「凄くうるさかった」と俊兄。

「晃平に聞いているんだけど？」僕は俊兄に殺気をあてる。

「お兄ちゃんは悲しいぞ」そこ、嘘泣きをするな！

晃平は晃平で苦笑いをしていた。

「ところで、亜耶。その”魔法人形”はどうした？」

「さてと、（戦いの）宴の準備は出来たかい？ 俊兄？」

さっきも言ったと思うが僕は”魔法人形”と言う呼び名は嫌いだ。だって、いくら造られたと言っても人間は人間じゃない？

「出来てないです」兄は汗を掻いている。さてと、始めますか。

僕は、目を閉じ魔力を暴走させた。

僕は闇と水属性の魔力弾を兄に向って放った。

「闇と水！？ 俺の苦手な属性だあ！」兄はそう叫び急いでバリアを張った。

魔力弾はバリアに当たり・・・バリアをすり抜けた。

「嘘だろ！？ 対策まで！！」

爆発音が辺りに・・・と言ってもこの部屋だけなんだけど・・・響いた。

「リタに謝れ！」僕がそう言った途端辺りの空気が変わった。

俊兄の本気が来る！！

僕はリタを下がらせて、半分だけ戦闘用の思考に変えた。

「亜耶。それはなんだ？」

「リタに謝れ」僕は魔力弾を5つ頭上に出現させ、いつでも放てるようにスタンバイしておく。

「すまないな、リタ」と兄はそう言い同時転移の準備をしていた。

勿論、対象は僕だろう。

僕は、魔力弾を魔力に戻して体内に戻した。

「リタ、好きにしてくれね」

俊兄と僕は消えた。

「おい、亜耶。どうゆうことだ？」 俊兄は戦闘モードに入っていた。

「魔法人形と言ったでしょ？ リタは人間なんだよっ！」

「人形は人形でしか無い」無表情で僕を見る俊兄。

僕は、何かがキレた。

「ふざけるな！！」僕は撲滅魔法を放ったがそれを避ける。

ならば、この世界―星―ごと破壊してやる！！

それをイメージする。それを発現するために魔力が吸い取られていく。

「うおおおおお！」僕は声を出して魔法を発動した。

星壊しを。

地面が、世界が、星全体が揺れている。

「まさか！！」俊兄は叫んだが遅い！！

僕は僕で、全保有魔力の80%を今ので使ってしまった。

残り5%か。戻るのに精一杯か。

僕は、一瞬の内に兄に近づくみぞうちを殴り気絶させ元の世界に戻った。

僕は気絶させた俊兄をソファに寝かした。

「うっ」僕は大量の魔力を消費した事で目まい、倦怠感、眠気がどっと溢れる。

立っていられずに、床に倒れそのまま寝た。

（星）

星の崩壊は止まった。発動者が居なくなったためキャンセルされたのだ。

救われた。命拾いをしたとその星は思った。

「晃平」

”兄妹”喧嘩で何してるんだか。

俺は床で寝ている亜耶を――お姫様抱っこして運んで――俺のベッドに寝かせた。

さてと、亜耶が起きるまで二人で何をしていればいいんだ？

「亜耶」

僕はゆっくりと目を開けた。ベッド？

晃平が寝かせてくれたんだ。

うう、だるい。

でも、さっきよりはましだ。幾らか魔力が回復したのだろう。

1日魔法使うの避けないと。僕は無意識に出ている魔力を操作して放出しないようにした。

「よし、今の時間は……」僕は独り言を言いながら時計を探す。あつ、携帯で見ればいいんだと途中で気が付き携帯を開き時刻を確認する。

まだ1時間しか経っていないのか。

僕はボーとした頭でリビングに向かった。

僕は晃平に近づきお礼を言った。

「晃平、ベッドに運んでくれてありがとう」と。

「ああ、気にするな」と晃平は素っ気なく返すがいつもの事だから気にしない。

「俊兄は？」僕は声のトーンを下げて言う。

「俺かい？」俊兄は僕の後ろに居たのだ。

「さっきはごめんね。頭に血が昇ってたみたい」僕は素直に俊兄に謝った。

「気にするな、俺も悪かったんだから」

「……………」

「亜耶様。魔力が少なくて調子が悪そうです」と僕を気遣ってくれるリタ。

「ありがとう。魔力を制御しているし、辺りにある魔力も吸収しているから大丈夫だよ」

「そうですか」

「うん」と僕は笑顔で言った。

「魔法組織に行ってくる」と言って僕は歩いて拠点に向かった。

（リタ）

亜耶様は大丈夫と言ってましたが心配です。

こっそり、ついていきますか。

そう思った瞬間に身体が動いた。

（晃平）

亜耶はきつと兄妹喧嘩の後始末をするために魔法組織に行ったんだ。星を半壊させるほどの魔法を放ったもんなあ、後始末やらないといけないもんな。

（亜耶）

僕は今、僕専用の仕事部屋に居る。

そして、部下達に拘束魔法をかけられて足が動かない。

普段ならば、簡単に千切れるのに。魔力不足を言い事に。

「後で見ているよ」僕は恐ろしく低い声で言った。てか、言うこと出来たんだ。

僕はどんどん仕事を片付けている。その間も微力ながら魔力を吸い取っている。

拘束魔法，空間に漂っている魔力から。

「さてと。覚悟はいい？」僕は殺気を微量ながら出した。吸収魔法を発動させ、拘束魔法の構成魔力を奪い取った。

「ひいひい！」部下が怯え出した。

「大丈夫。魔法で1時間眠ってもらっただけだから」と言い、僕は魔法を発動させた。

「ふう。せっかく集まった魔力が…」まあ、10分しか眠らないようにしておいてからその分魔力使用量は低いけど。

さてと、帰るか。

「？」

やはり、あいつは消さねばならないな。

人形共にやらせるか。

「宮原 早弥よ。桐原 亜耶と接触し、友好関係を築き弱点を探れ」

「はっ！」早弥はそう言うと言姿を消した。

「亜耶」

僕は晃平の家に帰ってる途中だった。

いきなり背後から、転移魔法の気配が現れ一人の男が現れた。

「亜耶さん、ですよ？ 私は宮原 早弥（みやはら さや）と申します」堅苦しい挨拶をしてくる男——早弥。

早弥の気配を探り何者かを推定する。

妨害だ！？？僕は、ジャミングが出来る人材を持っている組織を頭の情報から検索する。

打倒魔法組織，魔法自由化，魔法結社ぐらいが有力だろう。でもどうして、僕に接触を？

僕は表には出さずに警戒する。

「僕は、桐原 亜耶です。僕に何か用ですか？ 打倒魔法組織さん？」

と組織名を出す。

「やはり、お分かりでしたか。下手に手を出さない方がいいですよ？組織内ではTOP3に入ってますから」と早弥は言って殺気を出す。

「過信はするな。この言葉はうちの組織の言葉でね。後、相手を見くぶりすぎだ！」僕も殺気を出した。

僕は戦闘が始まる前にポケットから濃縮した魔力が入っている錠剤を飲む。

「魔力も（半分は）回復した事だし、やりますか」と僕はため息をつきながら言った。

「此処は私の深層心理！何ものも勝つ事は出来ない」彼は、魔術の術を詠んでいる。

ならば！

「はああっ！」僕は右手を早弥に向け闇の魔力弾を放つ。

「ちっ、バリア！」早弥は深層心理をこの世界に出す術を止めてバリアを張った。

「魔術か。魔術は魔法の下位版って知ってる？」バリアにヒビが入り割れる。

「うぐあ！」

「退け」僕はそう言いその場を去った。

僕は晃平の部屋に行きベッドに倒れる。

呼吸が荒い。あの錠剤は人工的に造られた魔力の塊であるために服用した後はこういった副作用が起こる。

「はあ…はあ…。苦し…い」僕はそのまま意識を失った。

#### 4話（前書き）

今回は、きりのいいところできらせてもらいました。

7／17 連載。

12／24 修正（葉月の名字変更）。



## 4話

（亜耶）

あれ、頭になんか乗ってる？

ああ、そうか。気を失ってたんだ。

「うっ」と僕はうめき、目をゆっくりと開く。

「気付いたか？」そこには晃平と俊兄が居た。

ちなみに今、言ったのは晃平。

「うん。どのくらい寝てた？」

「1日」前よりは短くなったな。

僕は上半身だけを起こす。

「何があったんだ？」と俊兄がようやく口を開いた。

「打倒魔法組織のTOP3が僕に接触して、小規模だけど戦闘になってその際に魔力の錠剤を飲んで今の状況に」

僕は要点だけを俊兄と晃平に伝えた。早弥の名前を出さずに。

「そうか。亜耶に手を出した事を後悔させなければならぬな」と

俊兄は恐ろしい事を言う。

「開戦理由になるからな。組織の一員に手を出したからな」と晃平も言う。

「平和的に解決しようよ？」

「いや、男なら戦いだああ！」俊兄と晃平は同時に言った。

ああ、TOP1とTOP3がそんな事を言ったら本当になるじゃない！それは僕としては避けたい。

「平和的に。ねっ！？」

「いや、開戦だ！！」避けませんでした。

（早弥）

ちっ、魔術だときつい。

「負けたのか」この声は!?

「閣下。魔術だと何処まで有効か試してみただけです」と私は平然に言う。

「そうか」

私は無言でその場を去った。

「亜耶」

僕は、独り公園に居る。風が当たって気持ちいい。ここに居ると落ち着くのだ。

「早弥」僕は名前を呟く。

昔、何処かで会った事があるような気がした。

「亜耶。思い出してくれた?」この声は早弥?

「さ、さや?」僕は振り向き名前を言う。

「小さい時の事覚えてる?」

「覚えて……ない」僕は少し嘘をついた。

「そうなんだ」早弥は悲しそうな顔をする。

「なぜ君がそっちにいる?」

「私は孤児だね。そこで引き取ってもらい育てられたんだ」

「だって、僕たちは小学で会ったじゃないか!!」

「小学までは普通に過ごしてたんだ。中学からだよ地獄は」

僕は悲しくなり俯く。

「じゃ、今からでも遅くない! こっちに来て? 僕が保障する!」

「相変わらずだな。昔から変わっていない。だが無理だ。閣下が居るまではな!」早弥は魔力弾を放った。

僕はそれを避ける。

「じゃ、倒せばいいんだよね? 昔と同じように過ごせるんだよね?」

「そうなる!」

突如、後ろから”攻撃”が来る。

「っ」僕は舌打ちをして回避した。

「名称『KOKU—D』命令はただ一つ。オリジナルを破壊する事」  
無機質に語る僕の違法コピー。

「っ、ならば！ オリジナル権限『命令削除』！」僕は権限を使い  
その命令を削除しようと試みたのだが。

魔力弾を僕に向け放った。

僕はそれに魔力弾を投げ相殺させる。

「組織か？」と僕は短く早弥に言う。

「ああ。お前の能力110%で使う事が出来る」

僕、暴走しないと勝てないじゃん。あれ、僕いつからバトルジャン  
キーになったの？

早弥、なんで離れているのかな？

「まあ、いいや。僕にはむこうとするなんて100年は早いよ？」  
と僕は『KOKU—D』に殺気を当てながら言う。

殺気を当てた瞬間、僕は周りに被害を与えないために結界を張った。  
思考を戦闘モードに替えた。その替えた瞬間に魔力、能力が一気に  
上がる。一種のリミッターなのだ。

「僕を楽しませてよね」魔力弾を数発『KOKU—D』に放つ。

『KOKU—D』は避けたが、魔力弾に当たった。そう追尾型魔力  
弾なのだ。

「技名『魔力弾』属性付与『闇』発射」と『KOKU—D』は言い  
魔力弾を放つ。

「重力変動！」僕はイメージする時間が惜しいので技名を言い発動  
させる。

重力が変動して魔力弾が地面に落ちる。

「対象を『KOKU—D』に！！」僕は重力変動の対象を『KOK  
U—D』に変更して魔法人形の核である『魔法エンジン』を無理や  
り破壊させる。

魔法エンジンが重力に耐えられなくなり爆発して身体は蒸発した。

僕は、気配が完全に無くなったのを確認してから結界を解いて、思  
考を元に戻した。

「はぁ．．．はぁ」少し息が荒くて深呼吸をして落ち着かせようとする。

「亜耶!」この声は晃平の声だ。いつの間に”察知”して来たのかな。

早弥は目つきを鋭くして晃平に殺気を放った。

「二人．．．とも．．．ダメだよ」と二人に向け言うが聞こえてないらしい。

急いで呼吸を整えないと、戦闘になってしまう。

「お前か。亜耶をこんな風にしたのは?」晃平も声を低く出して殺気を放った。

「君さ、亜耶のなんなわけ?」と早弥は言う。

「てめええ!!」晃平は魔力弾を両手に造りそれを放つ。

早弥はバリアを張って笑っている。

僕は新たな気配を感じた。

僕は念話を使い、(新しい気配がこっちに向かっているから気をつけて)と伝える。

伝えた瞬間、真上から焰弾が飛んでくる。

「くっ!」晃平と早弥はそう言って焰弾を避ける。

「二人とも、大丈夫!?」ようやく声が出せるようになった僕は大声で言った。

「ああ。大丈夫だ!」

「お見事」拍手をしながら空からおりてくる(多分)少年。

「てめええ!」晃平と早弥は少年に向かって魔力弾を放つ。

その少年は身動きも防御もしなかった。魔力弾を跳ね返して晃平達にぶつかり爆発した。

「ぐっああ!」

「晃平！ 早弥！」僕はその少年を睨む。

「僕に戦いを挑むつもり？ でも初めて会ったら自己紹介だよな？」

「僕は、桐原 亜耶。君は？」

「及川 葉月」自己紹介を終えた瞬間に僕は闇を弾にして葉月に向けて放った。

それを見た葉月はスイッチが替わったように感じた。

僕の弾を避けて「亜耶は俺には勝てない」と葉月は僕に告げる。

分かる。”戦闘思考” 通常思考”が今のままでは勝てないという僕に伝えている。

だけど。だからこのまま終わらせるわけにはいかない！！

「うおおお——！」僕は辺りに結界を張りビームを数発放つが、全てかわされてしまった。

「ちっ！」僕は思考を”戦闘思考”に切り替えた。

「自分の世界！！」僕は自分の世界を結界内に造った。

「葉月の能力はこれで幾らか落ちた。これでどうだっ！」ビームを放った。

「この程度か」葉月はそう言うとう右手を僕に向けた。まずい！来る！ビームがっ！！

「強くなれ」ビームが右腕を掠った。

我慢出来ないほどの痛みがこみ上げてくる。

「ぐあああああ！」僕の意識はそこで途切れた。

（葉月）

「強くなれ」と俺は言いビームで右腕を掠らせる。

「ぐあああああ！！！」亜耶は叫んで気を失った。

亜耶は覚悟が足りないな。これでは本当の力が発揮できない。

俺は気絶している3人に治癒魔法を掛けてからその場を離れた。

（亜耶）

初めて負けた。まあ自分の力を過信してたわけじゃないけど。思考も負けるってわかってたし。何が原因なのかもわかっている。さてと、そろそろ起きますか。

「晃平。早弥」僕は二人を優しく身体をさする。

「「ん？」」よかった、二人とも起きてくれた。

「晃平の家に連れて行くよ。良いよね？」と僕は晃平に伝え、僕達はワープした。

疲れるよ。3人をワープさせるのって。

「亜耶、どうしたんだ！ その傷は！！」と俊兄は僕を心配して大声で言ってくる。

「大丈夫。治してくれたし。それと僕もそろそろ覚悟を決めないといけないかも」

その覚悟とは、”殺し”。僕は今まで撲滅魔法とか使ってはいるが一度も殺した事はない。

大体は、眠らせているのだ。

「俊兄。2人を治してあげて」と言い僕は晃平の部屋に行く。

僕は部屋に入ると同時に防音魔法をかけて泣いた。

覚悟の怖さに。

（俊）

少し時間をさかのぼる。

（なんだこの魔力量は！！ 亜耶以上だっ！）

膨大な魔力を所持している人間の気配を察知した俺は、亜耶の事が心配になってくる。

いや、今は信じよう。それに亜耶を傷つけければ、俺が鉄槌を下して

やるさ。

数分後、膨大な魔力の所持者の反応が消えた。そしてその数十分後、怪我をした亜耶が帰ってきたのだ。

「亜耶、どうしたんだ！ その傷は！！」と慌てて言った。

「大丈夫。治してくれたし。それと僕もそろそろ覚悟を決めないといけないかも」と亜耶は言う。

覚悟とは”殺し”の事だろう。亜耶は撲滅魔法を使ったりするが、対象は全て建造物だ。

人間には一度も使った事がない。俺は今でこそ殺しに慣れているのだが、最初の内は怖かった。

亜耶にはそんな物に慣れてほしくは無いが、自分で言っているので仕方がないか。

（葉月）

桐原 亜耶。……”神の子供”。僕と同類の存在か。

さっきは、ひどい事しちゃったな。時間が経ったら謝りにいこう。

この時、神界に居る神が動きはじめた。

#### 4話（後書き）

亜耶の正体がだんだんわかってきました。

それにしても、設定増えてきているような感じがしてならない。



## 5話（前書き）

今回も短いです。

7／19 投稿。

## 5話

（亜耶）

僕はいつの間にか寝てたみたいだ。泣き疲れて眠るなんて。はあ。

僕は身体を見てみた。怪我が”完全に”治っていた。

「”神の子供”が覚醒した？」僕は自分の持っている力が覚醒した事を疑った。

神の子供。その魂は元は神様だった。だが、何ものかに殺され現世に降りる。

それが神の子供。その神様の能力が使えたり、自治治癒力が以上に高くなる。

僕は、僕の魂の本質を知っていた。いや、感じ取っていたと言うべきか。

いつか覚醒する日が来ることは知っていた。でも、まさか今日なんて。

「葉月も、”神の子供”なんだよな」あの時、微かだけど僕の魂は共鳴していた。

「”創造神”よりも上あるいは、同程度の力を持つ神ってなんだ？」よし、葉月に会おう。僕は急いで玄関に向かった。

僕は玄関を開けて葉月を捜しに出かけようとしたのだが、「やあと本人に言われる。

「葉月。葉月も”神の子供”なんだよね」

「うん。そうだよ」

「まだあの時、覚醒してなかったんですけど？」と僕は愚痴る。

「知ってるよ。覚醒させてあげたでしょ？」

「させてあげただと？」僕は、高い声を低くして言った。

まあ、女の子になる前から高かったけどね。

だって、声変わり——第二次性徴が来ないんだもん！！

中学3年生——といっても卒業して来月から高校生になるのだが——  
—なのにな。

「お前は、なぜ声が低いんじゃないか！！」僕はキレていた。

葉月に。別件で。

「ちょっと待ってよ。高い方なんだけど？」

「低いんだよ！！ 僕より！！ 低い奴は皆痛い目にあえ！！」と

僕は言い魔力弾を造り放つ。

「えええ！僕にキレないでよ！！」

僕は数発、魔力弾を撃ち込んだ。

「それで、いくら覚醒してなかったとはいえ”創造神”が負けるってのはどうゆうこと？」

”破壊神”。同等の力ぐらいいは持つでしょ？」相性が悪いな。

「その”破壊神”が何の用で？」と僕は挑発してみる。

「この前の事、謝ろうと思って」

「あれ、結構痛かったんですけど！！」

「破壊神の力も少し出してたからね」

そうですか。

「我、創造神を倒せるとでも思っているのか？」

まだ力の制御がうまくできないな。

「うん」

「面白いな。僕と同等な力を持つ神。葉月」

そう。創造神は最高神。他の神の頂点に立つ神なのだ。

創造神は他の神の力も使えるのだ。

だが、破壊神と創造神は同時期に現れたために互角なのだ。

「よし、制御できた」

「早いね。ところで言葉遣い直さないの？」

「余計な御世話だ！！　これだけは男のままじゃないと！！」

「そうゆうこと」　葉月は理解したようだ。

「創造神の力で、元の姿に戻れないのかな？」

「それが本来の姿なんだよ」　葉月。ナニヲイッテイルノ？

「どうゆうこと？」

「創造神の。まあ神様は基本中性だけど創造神は女性よりだったんだよ」

「そうなんだ……」　ああ、さよなら。

「だけど！　僕を女の子にした張本人は退治しなければならない！」

僕は、イメージする。僕を女の子にした悪魔を。

「あれ？」　うん。これが悪魔だ。犯人だ。

「お前か。僕を女の子にしたのは！！」

「ちよっ！　攻撃しないで！！」　と言いながら（余裕そうに）かわす。

「僕は、創造神だ！　命令だ！　言え！」

「はっ、はい！　しましたっ！」　と急に直立不動になって、喋る悪魔。

「ちよっと、頭冷やそうよ」と葉月は僕に言ってくる。

冷してられるか。僕を女の子にした犯人だぞ！

「さてと。君の断末魔の叫びを聞かせてもらおうよ」と僕は悪魔に言うって。

魔力で構成した刀で斬った。

爆発が起こり辺りは爆風に飲み込まれる。

「ふう」

煙が消えると、”傷だらけの悪魔”が立っていた。

「なんで？」

「俺様は創造神に頼まれて」

「なんですと。僕が頼んだ？」

あいにくだが、僕には神の時の記憶がない。  
神界に戻った時に身体と記憶が再構成されるのだ。

「うそでしょおおお！」と叫び、僕は地面に力なく座り込んだ。

（葉月）

「うそでしょおおお！」と叫んで、亜耶は地面に力なく座り込んでしまった。

ああ。目が虚ろになってるよ。

「創造神の悪魔よ。制限付きで戻るようにしたら？」

「貴様に言われる……はい」なぜ従ったって？ 破壊神の力を出しただけだよ。

悪魔は亜耶を指さしすると亜耶の身体が光った。

（亜耶）

僕の身体が光った？

「制限つきだが戻るようになった。戻るのは1日6時間だけ」

「ありがと！ 6時間だけだと戻るんだねっ！」

救われた。元の姿に戻る事が出来た。——時間制限あるけど。

「悪魔さん、ありがと」と僕は悪魔にお礼を言って、二度と襲わない事を誓った。

（神界の神達）

我達が頂点に立つべきだ。だが現世にいる創造神が邪魔だ。  
排除するか。現世に居る間は力が無いはずだ。

数人の神が現世に降りて行った。その身体のまま。

（葉月）

「遂に動き出したんだ。創造神を消すために」

僕の言った事は、はしゃいでいる亜耶には聞こえなかった。  
僕は組織に帰った。

（降りた神）

今の創造神は力が使えない。絶好の機会だ。

”太陽神”と”大地神”は不気味に笑った。  
徐々に亜耶に近づいて行った。

（亜耶）

あの後、悪魔は神界に戻り、僕は鼻歌を歌いながら料理を作っている。

晃平と俊兄はどうやら出掛けてるらしく僕しか家に居ない。  
先ほどこから、気配がして気になる。

「むう」

「どうされたのですか？」リタだ。

「ん。なんでもないよ」と僕はリタに言った。

（間違いなく、こっちに来てる！リタを巻き込むわけにはいかな  
い）

「ごめん。ちょっと買い出しにいつてくる」と僕は嘘をついて外に出た。

僕は、公園にいる。

僕を狙っているらしくこっちに来ているのが分かる。

被害が少なくて済むように公園に”誘い込んだのだ”。

「独りですね。ならば話が早いっ！」と女性が僕に突っ込んできた。

僕は咄嗟にかわした。

「さすがね。魂だけでも”創造神”である事には変わりないのですね」

「君たちはだれなんだ」僕は殺気を出した。

「二人だとお分かりだとは。さすがです！ 創造神っ！」女性は焰の塊を造り僕に投げてくる。

僕は、結界を張りそれをかわした。

公園の遊具が溶けて無くなった。

（神様なのか？ でもなんで？）

「神？」

「いかにも。私は太陽神です」

「なぜ、僕を狙う？」殺気をさらにだして言った。

「頂点を私たちにするためです」と太陽神は不気味な笑顔で言う。神の気配を出しながら。

「我は創造神。神の頂点に君臨する者なり。<sup>神</sup>ひれ伏すがいい！」と僕は力を含みながら言った。

創造神の力に逆らえない太陽神はひれ伏してしまう。

「くっ！ 使えるですって！？」

「力を自由に使うのはいいが、主に逆らうとは……。次は無いぞ！」と僕は神じみた事を言い結界を解いてから家に帰った。

（神）

まさか、あれでもあの力だとは。

予想外だ。対抗するために同盟を結んでいる神と合体するか。全部と合体すれば創造神と同等の力になるはずだ。

（葉月）

創造神の事だし亜耶に任せるか。

まあ、神殺しを倒すために力を蓄えてる亜耶には必要なのかな。  
自分の力を持っている神を吸収することがね。

（『神殺し』と呼ばれる者）

”創造神”と”破壊神”を逃がしてしまったか。

だが俺は、また目の前に”現れる”ことを知っている。

だから。その時こそ消滅させてやろう。

神の頂点に立つ神達をね。



## 5話（後書き）

夏休みになってから短くなっていると感じる宮原葉月です。  
暑いのが嫌いゝ涼しくなってえ！

## 6話（前書き）

そろそろ、本編も終わりそう。

7／25 投稿。

## 6話

（亜耶）

二人とも遅いな。今日は冷やし中華なのに、麺茹でられないじゃん。

「先に食べてようか？」と僕はリタに言った。

「亜耶さんにお任せします」

「じゃ、作るから少し待っててね」と僕はリタに言って麺を2食茹で始めた。

（晃平）

俺は亜耶の兄と一緒に組織に来ていた。

「あの男。葉月は何者なんだ？」と俊は不機嫌そうに言う。

「亜耶と同じ力を持っていて、和解しました」

「そうか。だが亜耶に傷つけさせた事を……後悔させてやらなければ！」

そう。俊はシス（ブラ）コンなのだ。

俺は無言で自分の家に帰った。

（俊）

亜耶に傷つけた奴——葉月。

さてどう痛めつけよう。撲滅魔法か。それとも……ああ、考えただけで笑えてきた。

（亜耶）

「いただきます」僕達は冷し中華を食べていた。

なんか、この前もだったような。まあいいか。  
食べたいんだし。

「おいしい……です」とリタは言ってくれた。

「ありがとう」

あ、晃平の気配だ。帰って来たんだ。

「おかえり、晃平。何処行ってたの？」

「えっ……。いや、組織に行ってた」しどろもどろで答える晃平。

「……で馬鹿<sup>俊兄</sup>は？」

「まだ組織に居ると思う。あれだと今日は帰ってこないぜ……。き  
つと」

僕は晃平の言っている事が分からず首を傾げる。

「んー。よく分かんないけど今日は帰ってこないんだね？」

「ああ、そうだ」

「そうだ、冷し中華作るから待ってて」

僕は晃平にそう言っ、食べかけの冷し中華を置いたまま麺を茹で  
に台所に立った。

「はい、どうぞ」と僕は冷し中華を晃平に渡した。

「サンキューな。……いただきます」

僕は席に座り、食べかけの冷し中華を食べ始めた。

リタは僕が食べ始めた時に食べ終わってお風呂に行った。

「「ごちそうさまでした」」僕と晃平は同時に食べ終わったみたい  
で声がはもった。

僕は晃平の皿を片づけようとしたけど「皿ぐらい自分で洗うよ」と  
言われ断られた。

あ、僕のも持って行っちゃった。まあ、晃平自身が言ってるんだし  
任せるか。

僕はソファにいき、横になった。

くとある神

太陽神の持っている力の半分は創造神に吸収されてしまった。  
創造神――主の――前では私たちは無力なのだろうか？

主からは本来の力の半分は貰っている。つまり力は同じだということだ。

単体では、勝てないだろう。しかし、合体すればどうだろう。

いくら太陽神の力が無いに等しいとはいえども、差はそれだけだ。  
勝てるだろう。そして我が新たな創造神となるのだ！！

我は間の前に居る仲間の神を吸収し始めた。

く葉月

創造神よ。部下の性格設定をどこで、ミスしたんだよ。

――僕は呆れてため息をつくのであった。

く亜耶

僕は屋根の上で月を見ていた。風が僕を優しく包み込んでいる気がする。

その風に”神力”が微かに漂っている。

「これって、本来は僕の力なんだよな」

「返してもらっていいのかな」

「貴方様が望めば一気に吸収できますよ」僕はその声のする方を見た。

僕は創造神としての本質をだした。

「我を倒すと言うのか。傲慢な神よ」

「貴様を倒して余が新たな創造神となるのだ！」

「悪いけど、その力返してもらおうよ」と僕は口調を戻して言った。

「ぐああああ！」苦悶の声を上げるのは仲間の神を吸収して自分の欲望に忠実な神。

「これで、君にあげた力しかない。君さ、神じゃなくて欲望に忠実な悪魔だよね？」

僕はそう言いながら力を吸収していく。

「創造神様……。どうかお許し……」と言いながら消えていった。

「僕は神殺しを審判するために本来の力が必要なんだ。ごめんね」僕は、葉月の所にワープした。神殺しを倒すために。

「葉月。神殺しの所に行こう」

「うん、わかった」

神殺しの居る場所は神界——創造神の座。

「破壊神——僕の弟なんだね」と僕は言って神界にワープした。

（葉月）

「葉月。神殺しの所に行こう」と亜耶は僕に言う。

その答えは勿論。

「うん、わかった」

神殺しの居る場所は神界——創造神の座。

「破壊神——僕の弟なんだね」と亜耶はそう言ってワープした。

（そこまで、思い出したんだ）と僕は思った。

（神殺し）

遂に来了。この時間、この瞬間を！！

普通の神は殺す前にどっかにいってしまおうからよ。

「ふはははっ！」

（亜耶）

「これが終わったら、どっち手放すことになるんだろうね？」と僕は葉月に言った。

「さあね。でもどっちも手放さない可能性だったあるよ」と笑って答える葉月。

いくら僕達でも擦り傷ぐらいで済むといいけど。

「さて、遊あそぼうか」と神殺しは僕達に言った。

「僕は破壊神なり。罪を審判する者でもある。さあ君の罪を言えっ！」葉月は破壊神の力を使った。

「ぐっあああ！」神殺しはうめき声をあげて両膝をついた。

「無から万物を造り出す者。だが万物を無に還すもの者でもある。」

・・・この意味分かるよね？」

「あああははははっ！ 良い最高だ！ こうでなくちゃ！」途端、気配が変わった。

「君を隔離するよ」と僕は言い、神殺しを消した。否、無の世界に送った。

「じゃあ、帰ろうか」と僕は葉月に言った。

「うん」と葉月は応えて、僕達は帰った。

皆の居る場所、仲間が居る場所へ。

——神殺しは別の世界の創造神の堕ちた姿。

——だから、僕は知っていた。葉月も。

——昔に戻りたかったんだ。

僕と葉月は、空を見上げて笑っていた。

この心地よい世界に、生命の息吹きに。

「（晃平の）家に帰るけど、葉月も来てよ」と僕は笑顔で言う。

「そうだね。一緒に行こう」



## 6話（後書き）

読み返してみると、なぜか無理やり終わらせようとしている気がして……

改訂版を出そうかな。

と、前書きはここまでにしておいて。

この小説を読んでくださっている皆様。おはようございます。こんにちは。こんばんは。

楽しんでいただければ幸いです。

さて、次回予告ですが。

はつきり言っちゃうと”未定”です。

（てへっ♪

## 7話（俊視点が主）（前書き）

7話ですが、俊視点が主なので番外編な要素が強いですが、次話に関わってきますので。

遅くなりすみませんでした。

## 7話（俊視点が主）

僕と葉月は今、（晃平の）家に居ます。

「何処、行ってたんだ!？」と晃平と俊兄に怒られました。

「神界に行って二人で神殺しを倒してきたの」と僕は素直に言った。  
隣に居る葉月を見た途端、俊の気配が変わった。

昨日、亜耶は帰ってこなかった。

心配だ。もし事故に遭っていたら…と思った時、亜耶が帰ってきた。  
男を連れて。その男を見てみると『葉月』ではないか？

亜耶を傷付けた奴。殺す。

俺は殺気を当てて「何で、お前が居るんだ？ ああ？」と相手を威嚇する。

一瞬の間に、俺達はどこかの空間に居た。

「関心しないですね。初対面の人にいきなり殺気を当てるなんて」  
しかし、そんな事はどうでもいい。今は、こいつを！

「亜耶を傷つけた奴に言われたくないな」俺は更に殺気を当てるが  
平然としている。

「葉月、使っちゃダメだからね」と亜耶。なんだ？ 何があったんだああ！

「亜耶をおとすなあ！」

撲滅魔法が発動させたが、葉月はいつも簡単に片手で防ぐ。

「僕も”神の子供”って事、忘れてる？」葉月はそう言う魔力弾を投げる。

「くっ!？」俺も片手で防ぐが魔力弾の威力が強すぎて飛ばされた。

「俺は破壊神。創造物を破壊するっ!」葉月は周りに、どんどんクレーターを作ってゆく。

「葉月、全開はダメだよ」

「お前！ 俺の弟妹になにしてたんじゃー！」俺は葉月を殴るが効いていないようだ。

「何もしてないから」葉月はそう言う俺を殴り返す。

「ぐぼっあ！」後方に飛ばされる俺。今で骨が何本か折れてしまった。痛てえ！

「兄さん、大丈夫？」俺を気遣い首を傾げながら手を差し出してくれる優しい弟妹。

「骨が何本かやられたみたいだ」と俺は隠してもしようがないので素直に言う。

はあ、兄さんはいつも、と亜耶は言う魔法を使い俺を治してくれた。

そんな亜耶の姿を見て俺はつい感動して涙を流してしまう。

それを見た亜耶は冷たい目で見て、そそくさと俺から離れてしまう。

さてと、兄さんを治したし葉月を少し懲らしめなきゃ。

「葉月、分かってるよね」

これ以上は語りたくないの、終わりにしよう。

ただ、亜耶が葉月をボコボコにしていたとだけ言っておこう。

## 7話（俊視点为主）（後書き）

はじめましての方は、これからよろしく願います。  
久しぶりの方は、これからもよろしくおねがいします。

どうも、宮原葉月です。

7話は、俊が主役ともいえる話でございます。俊はブラコン（？）  
だとはっきりわかる話でもございます。

この設定はある小説に影響されているのですが……

後書きはここまでしておきます。

## 8話（前書き）

ぐだぐだ注意。

## 8話

皆さん、久しぶり！ 桐原 亜耶だよ。

この前、葉月が兄を限度を超えてボコボコにしていたので、葉月に撲滅魔法を使ってやり返しちやいました。てへっ。

でも”神の子供”だからなのか次の日には、完治してました。

「亜耶！ 現実逃避するなっ！」と晃平に言われ頭を叩かれる。

僕は叩かれた場所をさすりながら、晃平を睨んだ。痛みで、目からは涙が出ている。

「ひどいじゃないか。今のでかなりの脳細胞死んだよ！？」

ちなみに今は、男だ。この姿でいられるのは、今日はあと2時間。

「仕事をしないでボーとしてるのが悪い」と言いながらも僕の机に溜まっている依頼書や請求書などを片付けてくれている。

「仕事が多すぎるから…って、晃平は終わったの？」

「こういう仕事はまわされてこないから」そうですか。

さて、僕も真面目にやるかと思いきやパソコンにむかおうとした時にア撃警告  
ラートが鳴る。

「なんでこんな時に…！」

「他の奴に任せおうぜ」

押しつけるか。

「呼ばれてるみたいだから。後は頼んだっ！」僕はそう言い残して、端末の情報をもとに敵が居るだろう場所に走った。

敵を目視で確認した僕は、どれ程の技量を持っているかをみるために魔力弾を発射する。

「くっ…あれはっ！」と相手は端末を弄り、誰かと連絡を取る。

「…敵地でぼんやり連絡取っていていいの？」と敵―仮面を付けて

いて声も偽装している男――に薄ら笑いを浮かべながらさらに魔力弾を3発発射する。

「ちっ…終わったさ！」と敵は言うのと後退を始める。

「そうは…させない！」僕は敵の後ろに瞬間移動して手刀を放つ…が相手に止められて気づいた時には、鳩尾を殴られて僕は意識を失った。

俺は、鳩尾を軽く殴って気絶させて倒れないように身体を支える。  
「格闘は素人の域か…さてと、こいつを連れ出すか」と独り言を呟いてから、気絶させたTOP2を連れて組織打倒魔法組織に戻った。

「混沌…。戻りました」

「よくやった。してそれが亜耶TOP2か」

「はいそうです。どこに置いておきますか？」

「このソファに置いておくといい。下がっていいぞ」

「……」俺は一礼してから、部屋から出た。

自分に割り当てられた部屋に戻った俺は、顔に付けていた仮面を外してTOP2について考える。

―あれは偽の姿。本物の姿を現すのも時間の問題だ。変身している時とは顔が変わっていて同一人物だと考えにくい。

―姿を現す前に、逃がすか。

考えた瞬間、俺の身体は勝手に動いていた。

カチャとドアが開いた音に気がつきこちらを見ってくる上司。

「どうしたんだね。混と…」上司は俺のコードネームを途中までしか言えなかった。なぜなら俺が気絶させたからだ。

俺はまだ意識を失っている亜耶の身体を揺すり「起きろ！」と怒鳴



る。

「うぐっ…鳩尾が痛い…ってここは!？」と亜耶は言っている途中で目を開けて俺を見る。

「っ！ 早弥…ぐっ」

「安心しろ…。逃がしてやるから」

「わかった…。あれ結構、効いたよ」

「……」

「魔力波長」ああ、魔力波長偽装するの忘れてたぜ。

「…すまなかった」

「まあ、いいけどね」亜耶の身体が光り出し変化していく。

光りが収まるとそこには、男用の服を着た女の子が居た。

「はあ…家に帰って服着替えなきゃいけなくなったよ」と女の子—亜耶—は着ている服を見る。

身体が縮んでいるのか指先しか出ていなかった。

「それより早く逃げたらどうだ？ これ、起きてしまうぞ？」と俺は気絶している上司を指で差しながら言う。

「早弥も来ない？ 此処に居たら十中八九、反乱者として捕まってしまうよ」

「…ああ」

こうして、俺は亜耶を打倒魔法組織から逃がしたのだった。

早弥は僕を逃がした時に、監視カメラに撮られた事と上司を気絶させた事により手引きした事がバレてしまいそのせいで打倒魔法組織から脱出した。

魔法組織に自室として割り当てられている部屋で打倒魔法組織の事を兄さんに話した。

「今話した通りなんだけど、どうかな」

「そんなことはどうでもいいんだ。亜耶が無事ならば」

「……僕のことはいいいから。兄さんは結婚でもしたらどう？」

「それは、俺に死ねと言っているのかっ！」兄さんは重度のブラコン―今はシスコン―だったのだ。

「それより、早弥を僕のところ配属してくれないかな？」喚いている兄さんを見無視して要件を伝える。

「亜耶の頼みならば、やってやろう！」

さてと報酬ぐらいは用意しないといけないよね。

僕は空気を吸ってから、兄さんを見て笑顔で「兄さん、大好きっ！」と言ってから部屋を出た。

兄さんの助手が、気持ち悪い笑顔を浮かべているのを見て引いたことはいまでもない。

## 8話（後書き）

8／25 投稿。MF文庫の新刊発売日だあ。

次回もお楽しみに。

**番外編―夏だ！ 海だ！ えっ、水着！？ (上) (前書き)**

『僕の現実逃避』初の番外編です。

本編とは一切関係ございません！

番外編は、視点が本編よりちよくちよく変わります。  
読みにくいと思いますが…どうぞ。

番外編―夏だ！ 海だ！ えっ、水着！？ (上)

夏と云えば海ですよ。と云うことで今、俊兄さんと晃平と葉月、そして僕の4人で海に来ています。

でも、僕こと桐原 亜耶は：

「はあ：来るのに6時間経ってしまったてよ！」おかげで今の僕の姿は”男装した女の子”

「そんな事も、あろうかと思って水着持ってきてるよ」と言いながら葉月は笑顔で僕に、女の子用の水着を渡してきた。

「これって、上と下別れてるやつだよね……」

露出が多いんだよなあ：せめて学校用の水着じゃないと。

3人は、僕が今持っている水着に指さしして「それがイイ！」と同時にいった。

仕方がないなか、と思いながら更衣室に着替えに行った。勿論、覗かないでねと釘を刺しておいたよ。

俺は、亜耶が更衣室に入った後、思考に着替え姿を覗きたいとよこしmana気持ちが入ってきた。

俺はその気持ちを抑えるが、数秒で耐えられなくなりチラツと下から覗いた。

純白のブラジャーを付けて下も上に合わせて同じ色の……そこで俺の思考は途切れた。

「晃平のばーか！」と言われ亜耶に魔法で眠らされたから。

晃平に下着姿を見られた僕は魔法で眠らせて、微妙に高まる胸の鼓動を抑えながらはあ、とため息をつく。

それから、万が一起きてしまった時のことを考えて、ササツと水着

に着替える。

着替えてから僕は、寝ていることを確認するために晃平を見る。

「まったくもう……見たいなら言って……って！ 何、考えてんだろう」と僕は頭を振った。

思考が落ち着いたのを確認すると、僕は更衣室から出た。晃平をボロ雑巾のように引きずって。

「遅くなってごめん！」と遠くにいる葉月と兄さんに走りながら片手を振って言う。

なんか、兄さんが僕の胸辺りに視線を向けているんですけど。

俺は、見た！ 何がって？ 亜耶が走っていて、大きな胸が上下に揺れているところを！

幸せだなあ、と想いながら俺は祝福の時を記憶に刻む。

ガッンッ！

あれ？ 意識が——だがこの瞬間は脳内HDDにしっかり刻み込んだから心配ないと思いながら俺は幸せそうな顔をして意識を——失った。

さてと、後始末は葉月に任せようかな。

「まったく……葉月、片付けてきてくれない？」

「亜耶、なんか飲んだりした？」いきなりなんですか。たしかに飲んでだけ。

「うん飲んだよ。あのジュース美味しかったなあ……」

「……そうなんだ」と言って葉月は兄さんを担いで、パラソルの所に運びに行った。

なんだったんだろう？ と考えるも無駄だと思って僕は海に飛び込んで、背泳ぎで泳いだ。

「気持ちいいわー」暑さで体温が上がっている身体には海水の温度

が気持ちよく感じた。

僕は、俊さんをパラソルの陰に横たわらせてから、ある人物に会いに空間を飛んだ。

「今回も君でしょ？」と空間を飛んだ直後に人物に言う。

「そうだよ…あはは。相変わらず面白いよね」悪魔は笑いながら僕に言う。

「君なんだ。本来の亜耶が好きだから戻してよね」

「やだ。こっちの方が面白いからね」悪魔はやっぱり自分の事しか考えられないか。

「じゃあ、実力行使でやらせてもらおうよ」《破壊神》の力を使うのって久しぶりだから手加減できないかもね、と思いながら力を解放して悪魔に接近した。

僕は知らない人に話しかけた。

「ねえねえ。一人で泳ぐのって寂しいよね？ 俺達と泳がない？」と知らない男達が僕を誘っていた。

「いえ、連れがいるんで。結構です」と言ってそこから泳いで離れようとするが、腕を掴まれてしまった。

「可愛いからって、いい気になるなよ」と言いながらどこから出したのか知らないナイフが僕の首に付けられていた。

これって、魔法使って倒していいんだっけ…正当防衛だからいい？と考えてたら男達が倒れていた。

僕は、男達を倒したと思われる人物に振り向いた。—知らない人だ。

この人達 気絶させた  
「男達を倒したのは貴方ですか？」

「嫌がっている女性を放っておけないからね」

「僕は、男なんだああ!」

「これで、男と言えるのかい?」とその男は僕の胸を揉んでくる。

「…あん…僕は男だ。…やめ…ろ」と力で離そうとするが意識がボーとなりはじめて使えない。

「おい、…離れろよ」この声…は?

男は揉むのを止めて僕を突き放して「ああん?」と男にがんを飛ばした。―晃平だった。

晃平は突き飛ばされた僕のもとに走り、大丈夫か? と気遣ってくれた。

「うん」まだ、少しボーとするけどね。

晃平は立ち上がって男に近づいた。

「亜耶に嫌な思いをさせやがって!」と言って男を殴った。

―男を殴った晃平を見て、私はカッコいいと思った。



**番外編―夏だ！ 海だ！ えっ、水着！？ (上) (後書き)**

初の番外編。でも、めっちゃくちゃ！  
いつか、改稿しよう。

12月29日 修正。

番外編―夏だ！ 海だ！ えっ、水着！？ (下) (前書き)

時間開けてすみませんでした。

番外編―夏だ！ 海だ！ えっ、水着！？ (下)

私は、桐原<sup>きりはら</sup> 亜耶<sup>あや</sup>です。

今、気付いたんですが一人称変わってますよね？ なにかに意識が浸食されているみたい…でも今は置いておこうかな。

あれから私達は、海で遊んだ後に一晩泊るために海から離れている旅館に行って、今は旅館のは部屋に居るのだ。

「ねえ、葉月。私がこうなったの知っているんでしょう？」私がそう聞くと葉月は身体を微かだが震わした。

その反応だと知っているみたいだけど、はぐらかして話してくれない。

「はあ…後でいいから、ちゃんと教えてね」と言っただけで私は身体を洗いに温泉に入りに行った。

温泉といったら… 覗きですよね？ 俺…こと晃平は、露天風呂

呂に亜耶が居るとの情報が入ったので早速向かった。

―ステルス：OK 魔力波偽装：OK 魔力波隠<sup>ステルス</sup>ぺい：OK

よし、万端だ！ いざ、楽園へ！ 俺は男湯と女湯を隔てている壁をよじ登り、堂々と覗く。

亜耶はどこだろう… と必死に探してみるが居ない。

はて？ ここに居るはずなんだが？ 突然、背筋が寒気に襲われた。

「…ここでも何してるのかな？」と浴衣姿の亜耶。

「ナンデモナイデス」俺はここから逃げようとするけど拘束されてしまう。

「覗くなんて最低だね。晃平？」

良い笑顔をしている亜耶が魔法を放った。

俺は、回避しようとするが拘束されている訳で……。風船が割れたような爆発音がして衝撃波しょうげきはが襲ってくる。

拘束が解けたのか俺の身体は、支えを失って地面に力なく倒れた。

「晃平のばかやろう……」と亜耶が小さく言ったが聞こえずに闇に吸いこまれていった。

晃平は、朝になるまで部屋に帰ってこなかったという……。

僕は、背伸びをしながらうーん、と唸りながら起きた。

まだ、寝て起きたばかりの思考がぼんやりした状態で昨日の事を振り返る。

———と、ある場面が出て思考が一瞬ではっきりしてしまう。

昨日の僕は何をやっていたんだ？ 何かの影響に違いない。でも、

何かの影響だとしても僕がやったことだ。

……憂鬱だ。

その後、朝食を食べて行きと同じように電車で家に帰った。

夜中に、一人で廃墟された世界に行って魔法を乱射してストレスを解消したのは云うまでもない。

**番外編―夏だ！ 海だ！ えっ、水着！？ （下）（後書き）**

**【番外編―夏だ！ 海だ！ えっ、水着！？ 終了】**

初の番外編いかがでしたでしょうか？

本当は、もう少し長い予定だったのですがうだうだ書くよりはここ  
で終わらせても…と思い終わらせました。

最後になりましたが、読んでくださってありがとうございます。

12月29日 加筆修正。

## 9話

僕は、自分の仕事部屋に帰って早速、晃平に伝える。

「そうなのか。…今日から魔法組織で働くのか」

「うん」と肯定して僕の助手としてね、と付け足す。

早弥はそうか、と言っていたのでOKという事でいいだろう。

「早弥。これからよろしくね!」と僕は笑顔で言った。

「ああ…」と早弥が言ってから僕は握手を求めべく手を差し出して固い握手をした。

その後、早弥に山になっている資料の整理を頼んで任務…という名のサボリにはしった。

まあ、きつと早弥の事だろうから分かってるんだよねあ…と思ってしまい胸がズキリと痛んでしまうけど、僕は市内を巡回しに行くのだった。

僕は住宅街を歩いている。…ここは平和だなあ。

異状ないや…、次の所に行こうかな。と考えてショッピングセンターに向かおうとした時に、悲鳴が聞こえた。

なんで、僕っていつもこう巻き込まれるのかな… と思いながらも悲鳴が発せられた方角に走り出した。

走っている途中で気付いたことだが、瞬間移動すれば早く着いたのではと思う。  
ワープ

「大丈夫ですかっ?」僕は息を荒げながら男達に囲まれている女性に言う。

瞬間移動をして、女性を男達から見えないところに移動させて逃がそうとしたがコソコソと見てくる。

ここなら、安全だろう。

「なんだ、この野郎！」そう、今の僕は明日：男に帰れる時間を強制的に使得男に帰っている。

「集団で襲うとは：」かわいそうに。今で心に傷をつけてしまったらどうするんだよ！

「心に傷をつけるのがどれ程、苦しいのか分からせてあげよう」と男達に宣言をする。

魔法を使ってそれぞれの恐怖心を煽るため、幻術を使って幻想を見せる。まぼろし

「まあ、こんなもんでいいでしょ」と小さく呟いて、女性のもとへと歩いて行く。

「もう大丈夫ですよ。：あつ、この事は内密にしてくれるとありがたいです」

「ひゃい！　：わかりました」

途中、噛んだみたいだけど大丈夫かな？　家まで送った方がいいのかな。

「：自分だけで帰れる？」

「はい」

「じゃあ、気を付けてね」と僕は言い残して家に戻った。

この時、僕は知らなかった。この女性の事を：

―あの人物が：：亜耶。人形のオリジナル。

―それだけの實力を持つ人間。魔法自由化こっちに引き込みたい：：だから、私は接触したのだ。

やってしまった：明日は、男に帰れないなあ。がつくりとうな垂れる。

家のドアを音を立てない様に開け気配を消して、お風呂に向かった。

★★★

お風呂から上がった僕は、晃平の部屋で右手の人差し指を下唇に添えながら、さっきの出来事を考えていた。

男達に襲われていた女性から魔力反応が在ったのだ。それも魔力を隠して。

どう考えてもおかしい……うちと敵対している組織かな？

じゃあ、なぜ僕と接触した？ 僕狙い？

とりあえず、様子を見ないとな。兄さんにはまだ言わなくていいよね。

この時、運命の歯車が廻り出した事に、僕は気付いていなかった。



## 9話（後書き）

久しぶりの本編ですね。∴遅くてすみません。

## 10話

私は組織に戻って、総帥の前にいた。

「禍よ、何をしているのだ！ 命令とは違うぞっ！」怒声の後に、パンッ！ という乾いた音が部屋中に響いた。

右頬を叩かれたのだ。

私は頬を押さえて理由を言った。

「今回は、”見極め”です。何事も情報収集ですよね？」

私の言葉を聞いた総帥に、反対の頬——左頬を叩かれた。

「……今度は『KOKU-G-P』も連れて行け」

「わかりました」

人形を連れて行くのか…嫌だな。

命令に従う為に、瞬間移動した。

「しっかりしろ、桐原 亜耶。ボ—としちやいけないんだ。周囲を  
探索して”敵”に備えるんだ。」

そう思っているにも「ふあああ」と欠伸が出てしまう。

その時だった。魔力反応があったのだ。——二つ。内一つは魔法人だ。

「お久しぶりです。亜耶様」この声と顔には覚えがあった。

——この前、不良に絡まれていた女性…その人だった。

僕は思考を入れ替える。

「対魔法組織の者か？」

「そうですね。『KOKU-G-P』コード1開始」

「開始します」と無感情な声を出しながら僕に近づいてくる。

「『KOKU-G-P』やめなさい。感情抑制を解除」

「…俺の意味だ。解除はしている」自分の意思か。まずはその縛りを破壊しないと駄目みたいだね。

「それは洗脳されているからでしょ」複数の思考で、洗脳を解く魔法を構成し始める。

「何をやっているの？ 『K O K U — G — P』！ おとなしくは、やらせて貰えないか……。」

——戦いの幕が今、あがった。

## 10話（後書き）

今回は中途半端なところで区切らせてもらいました！  
次回のためにつ！

## 設定（前書き）

新キャラが含まれている場合があります。

## 設定

2010／12／24 時点の設定

### ■登場人物

桐原 亜耶<sup>きりはら あや</sup>・・・本作の主人公。一人称は『僕』

魔法と魔術が使える。一応武術も出来るが素人の域。

戦闘スタイルは魔法と魔術だが、武術（ほとんど使わない）を使うことがある。

魔法組織で提督の一人である。認識番号は『2123』

悪魔のせいで性別が女になってしまった。

神の子供。魂の本質は”創造神”

桐原 俊<sup>きりはら しゅん</sup>・・・

亜耶の兄。亜耶からは俊兄<sup>しゅんにい</sup>と呼ばれている。最近は、兄さんと呼ばれている。

一人称は『俺』 亜耶と同じく、魔法と魔術が使える。

戦闘スタイルは魔法しか使わない。（本人曰く、魔術は発動に時間がかかるからだとか）

魔法組織での位は元帥である。認識番号は『0001』

皐月 晃平<sup>さつき こうへい</sup>・・・

亜耶の親友。一人称は『俺』

亜耶と同じく、魔法と魔術と武術。

戦闘スタイルは魔法と武術。魔法組織で提督の一人である。認識番

号は『2124』

宮原 早弥<sup>みやはら せいや</sup>・・・

打倒魔法組織の一員。一人称は『私』『俺』  
実力はTOP3に入っている。亜耶とは幼稚園で会った事がある。

悪魔・・・

亜耶を女にした張本人。一人称は『俺様』  
珍しい天使側の悪魔である（この悪魔しかいないのだが）。  
神様からの命令で『神の力』を使い亜耶を女にした。

及川 葉月<sup>おいかわ はづき</sup>・・・

魔法結社の一員で実力は1位。一人称は普段は『僕』で戦闘の時は『俺』

亜耶と同等かそれ以上の力を持っている。  
神の子供。魂の本質は”破壊神”

竹岡 静香<sup>たけおか しずか</sup>・・・

一人称は『私』

亜耶と幼馴染みで、同じ魔法学校に通っている。  
組織とは関わって無く、魔法を除けば一般人。

神様・・・

詳細は不明だが、創造神は次元ごとにいる。

『RITA-000-P』・・・  
プロトタイプの魔法人形で名称は『リタ』。桐原 亜耶の情報（戦  
闘能力など）が<sup>インプット</sup>入力されている。  
亜耶の戦闘能力を思うままに使いたいという対魔法組織の打倒魔法  
組織が造ったが肉体が能力に耐えられなく、能力の出力が50%ぐ  
らいしか出せないため廃棄された。

『RISA-S』・・・  
魔法人形『RITA-000-P』の改良強化型。名称は『リサ』。  
プロトタイプの欠点だった肉体が改善されて、能力の出力が70%  
までアップした。

『KOKU-D』・・・  
魔法人形の究極型。様々な遺伝子进行操作して誕生した魔法人形。  
出力はオリジナルの110%出せるが、感情表現が低く、寿命が短  
い。

『RISA-01』・・・  
『RISA-S』の増産型。01～10まで生産された。増産型の  
ため出力は60%に減少している。  
量産型は感情が無く、機械に等しいのが特徴。上位（プロトタイプ、  
オリジナル等）の存在は命令が可能。

『KOKU-G-P』・・・  
『KOKU-D』の改良版で試作品。様々な遺伝子を利用，操作し



て誕生した魔法人形。

出力はオリジナルの90%で前のより出力が下がっているが、感情が豊かになっていて、寿命がプロトタイプとほぼ同じになった。

←設定←

## ■神様

不老不死だが、神殺しに殺されると消滅してしまう。

## ■神の子供

神様が何かに殺され、自身の消滅を防ぐために神体を一時的に失い、魂が現世に逃げて人間になる。  
その人間を神の子供と言う。

## ■魔法人形

基本的に、人形はオリジナルの50%（人形にとってはそれが100%）の力しか使えない。

遺伝子を使うことから、バトルドール人造戦略機とも言われている。

## ■魔法，魔術について

魔術は魔法の劣化版（魔法を誰でも使えるようにした）であり、制限がある。

魔術は術式が必要であるが、魔法はイメージで発動できる。どちらも発動のためには魔力が必要である。

#### ■魔法組織

位が提督、元帥なのは組織の創立者が軍かぶれだったからである。現在は、極秘で国からは高額の援助（支援？）を貰っている。国からの援助もあり違法研究を潰すのが主な仕事となっている。

#### ■打倒魔法組織

魔法、魔術法を無視して違法研究をしている。

魔法組織を潰して、全組織を征服しようとたくらんでいる。

#### ■魔法自由化

魔法を魔術のように誰でも使えるようにするために研究をしている組織。

## ■魔法結社

比較的、合法的な組織で魔法組織と同盟を結ぼうとしているが進展していない。

## 11話

くっ、並列思考で術式構成と回避をしているけど、かなりきつい。今、僕と戦っている魔法人は戦闘改良型らしい。：そういえば、なんとなく『KOKU-D』に容姿が似ているな。と、考えている内に氷の矢が左肩を掠めた。

……危ない。余計な事にリソースを割いている場合じゃないね。  
洗脳を解く魔法の術式構成は、最終調整をすれば完成だ。回避して  
るけど、避けられなくなってきたるし。：どうしようかな。

その時だった。――僕の左腕に氷の矢が刺さった。咄嗟に僕は、  
痛みと云う人間に備わっている生存プログラムを切る。

そうする事で、痛みが感じなくなる。ただこれを切ると生命命に関わ  
る事もある。

はあ、はあ、と荒い息をしながら相手を見る。

「洗脳を解く鍵となれ！」一瞬の内に『KOKU-G-P』の後ろ  
に魔法で行き、魔法を帯びさせた拳で『KOKU-G-P』を殴っ  
て洗脳を解かせて気絶させた。

殴った直後に、女性が動き始めた。――動きと放出してる魔力量を  
見ると、相当な手練れだと分かる。

僕はちっ、と舌打ちをして後退する。

「役に立たなくなりましたし、私がやらなければなりませんね」と  
僕の後ろで言っ、衝撃波が僕を襲う。

崩れる体勢を魔法で修正し気配を探って、周囲に炎弾を捲き散らす。  
「あら、魔法組織のトップ2ってこんなもんなのかしら？」と僕を  
挑発させる言葉を女性が発する、がそれを無視する。

「うちの組織を倒す事を目的としている組織の要員が、この位の実  
力ね……そろそろ本気を出させてもらおうよ」

僕の言葉を聞いた後、女性はハッとした顔をするが僕は無表情な顔

で見つめる。

不意に、焰弾を女性に投げた。

「…そろそろ、名乗ってもらおうか？」と僕は女性の背後に立ち声を低くして言い、首に魔力で形成した刀を添えて、逃げられないように押さえる。

「花織。これが私の名前よ」女性——花織は観念した様で、やっと自分の名前を言った。

「花織……僕を襲ったのはなぜだ？ 命令か自分でやったのか、地位<sup>シ</sup>は？」刀を首に添えたまま僕は尋問する。

「命令よ。他は言えないわ…っ」くっ、僕とした事が！ 逃げられないように押さえてたのに、すり抜けられてしまった。

焰弾をあえてターゲットを決めないで発射させて、花織の反応をうかがう。——瞬間移動<sup>ワープ</sup>の術式構成を感じる。

「させるかああああ！」焰弾を直撃するコースで放った。

「避けられなっ!？」着弾すると同時に爆風が起こり辺りを薙ぎ払う。

僕は、魔力反応が微かにしているのを確認すると組織へと戻るのだった。

## 11話（後書き）

勝手でございますが、この話を最後に受験が終わるまで『停止』とさせていただきます。

## 番外編（前書き）

お気に入りに登録してくれた人に申し訳ないので、いそいで書き上げました。

番外編をどうぞ。

## 番外編

ここは、灯りがついていないが、ディスプレイの明かりでぼんやりとしている。

そのディスプレイにはこう書いてあった。

『魔法組織——桐原きりはら 亜耶あやの考察及び魔法人形性能』

「システムデータの読み込み開始」

そして、1体の魔法人形が稼働を始めた。

「読み込み完了。チューニングを開始します」

「終了。起動します」静かに両目が開いて、一瞬の内にその場から姿を消した。

私は、目標ターゲットを見ていた。——『桐原 亜耶』

休み時間らしく、友達と話をしている。——笑ったり、怒ったりと色んな表情を取っていた。

私は、感情プログラムが未完成だ。だから彼に負の感情を持った。彼はずるいと。



## 番外編（後書き）

誤字脱字，おかしい文法がありましたら，お知らせください。

## 12話(前書き)

2011年もおねがいますっ！

## 12話

組織へと戻った僕は、『例の件』を報告するかどうかを迷っていた。

あの人の深層意識を見た時に、『本当はやりたくない』と読めたんだ。だから、僕は……。

はああ、と自然にため息が出てしまう。

その時、僕の身体が突然光って、女の子になった。――男でいられる時間が終わったのだ。

「どうしたんだ、そんなにため息ばかりついて」と言いながら、早弥は僕の顔を覗き込む。

「ううん、ちょっと疲れてるだけだから。気にしてくれてありがとう」

「ああ……。それならいいんだがな」と早弥は言って自分の仕事へと戻る。

「早弥、ごめん。今日はもう帰るから」と言い残して僕は瞬間移動ワープを使った。――部屋に残留魔力を残して。

自分の部屋にワープした僕は――靴は玄関にワープさせた――自分のベッドに飛びこむ。

「何も考えるなっ！　寝るんだ！」と自分に言い聞かせて、魔法で自分を眠らせた。

亜耶が魔法を使って寝た途端に、足音も立てずに”誰か”が、部屋に入ってきた。

”俊”はニヤリと不気味に笑って、ベッドに侵入したのだった。

僕は、5歳ぐらいだった時の”夢”を見ていた。

あの時は、何をするのも二人で一緒だった。遊んだり、お風呂ふろに入ったり、寝たり。

でも、今さらなんで”こんな”夢を見るんだろうか。誰かに魔法まほうを掛けられた？——否、魔力は感じられなかった。

あの頃から、優しかった。それは今でも一緒。——でも、ブラコン……この場合はシスコンかな。それがひどくなってきた。

僕としては、好きな人彼女を見つけてほしいけどね。

——さてと、この微睡まじろみから目覚めますか。

目を覚めして僕は背伸びせのをする。

「んっ。はああ」と間抜けた声が出るが気にしない。だって、朝だもん。

ふと、そこで僕は気づいた。——隣に兄さんが寝ている事を。

兄さんの寝顔、久しぶりに見たなあ。おでこをつついてみるが、起きる気配がしない。

「ふふ。おはよう、兄さん」と僕はそう言い残して自分の部屋から出て行った。

僕は虚空こくうから携帯電話ケータイを取り出して、時刻を確認する。

「5時25分かあ。少し早いかな」と独り言を呟きながら、キッチンに立って朝食の準備を始める。

サラダ用とスープ用の野菜を手際良くきって、サラダ用をボウルに盛りつけをして鮮度が保つように冷蔵庫に入れておく。一品目完成。スープ用に取っておいたのを使って、スープを作る。味付けはシンプルに塩と胡椒こしょうだ。

最後に、ベーコンと目玉焼き焼いて完成させる。皿に盛って保温結ほおん界に入れておく。

「完成……っ」と僕はエプロンをイスに掛けて、リビングに行ってテレビを付けてニュースをやっているチャンネルに切り替える。

ニュースで気になるものがあつた。それは、海外のとある組織が  
大打撃を受けた事。<sup>ただけ</sup>

明らかに組織が関わっているということは明白だった。でも、何処<sup>どこ</sup>  
の組織がやったのかは手札が少なすぎるので判別できない。

そんな事をしている内に、兄さんが起きて来た。

「亜耶、おはよう」

「兄さん、おはよう。顔洗っておいでよ」僕はそう言っていると朝食をテ  
ーブルの上に並べて、ご飯をお茶碗<sup>ちやわん</sup>に盛って、兄さんが来るまで席  
に座って待つ。

兄さんは座って箸を持った事を確認して「いただきます」と言う。

食べ終わったので皿を片づけていると兄さんに呼ばれたので中断  
してリビングに行く。

「兄さん。どうしたの？」

「————が帰ってくるんだ」

最初の方、聞きずらかったな。

「何て言ったの？」

「だから……。親父とお袋が帰ってくるんだっ！」

僕はその言葉を耳に入れた途端に、全身から冷や汗が出てきて家を  
飛び出してしまった。

## 13話

僕はなぜか、家を飛び出していて気づいたら近所にある公園に来ていた。

この姿で両親に会うことに抵抗ていこうがあるから？　そうかもしれない。

——特に父さんには”この姿”を見られたくない。やっぱりあの悪魔を恨もうかな。

「はああ」

「お困りのようだね、お嬢さんじょうさん」僕は声のした方へ振り向くと、いかにも紳士的な服装をしている青年が、たっていた。

「いえ……」

「そうかい？　俺にはそう見えたんだが」似非えせだったのか。

さつきから、凄い気配を感じると思ったらこの人か。

「——目的はなんだ？」

僕の態度が急に変わった事に驚いたのか、それとも別の理由なのかは知らないけど驚愕きょうがくの表情を浮かべる。

「まあ、僕が関係しているでしょ？」

「魔法組織じんいんの人員は優秀ゆうしゅうだな」

僕は一瞬でその男の背後はいごにつき身体を拘束きんもんして尋問じんもんを始める。

「お前はどこの組織だ？」

「外国の組織」

「あつ。名前はなんだ？」

「——賢治けんじだ」それより、賢治の耳が赤くなっているのはなぜだろうか？

「もういいや。ありがとう、賢治」と言って拘束を解いた。

僕は友人に会うべく、空間移動フーブした。賢治が何か言っていたが、僕は気が付かなかった。

ワープが終わると、玄関の前。

僕はチャイムを鳴らして出てくるのを待つ。扉越しから「今、行きまあす!」と元気な声が聞こえてきて少し落ち着く。

扉が開く音がして僕を見つめる。

「久しぶり。終業式以来だね。静香」

「亜耶?」魔力波を読んで、僕の名前を言ったのだろう。

「うん」

「どうして、その姿に?」

「新しい魔法を作ろうとして、構成を間違えてしまってたね。それで戻するための魔法を創ってるんだけど、なかなか……」

「そうなんだ。夏休みが終わるまでになんとかしないとね」

そう、静香の言う通りなのだ。――夏休みが終わるまでになんとかしなければ、この姿で学校に行かなければならないのだ。

「亜耶。上がっててよ、お茶用意するから」

「うん。……お邪魔しまあす」静香に気付かれないように気配察知で家の中を調べるが、一つしかなかった。

つまり、僕と静香しか居ないわけだ。――入る前に、無意識に出している魔力を出さないようにした。

静香に言われたように、ソファに座って待ってるのだけど。なかなか来ない。

「ごめんね。お菓子探してた」テーブルに紅茶と様々なクッキーが置かれていく。

「いや、いいよ。お邪魔してるから」僕はそう言いながら、持ってきてくれたクッキーを口を含む。

もぐもぐ、と口を動かしながらクッキーを味わって食べる。

「このクッキーおいしいね」

「そう? よかったわ」

その後も、クッキーを食べながらの談笑は夕方まで続いた。

僕はふと、外を見るときれいな夕焼けが出て夕陽が部屋に射し込む。

「もう、こんな時間かあ」

「今日、私だけだから泊まっていくな？」



## 14話

——「今日、私<sup>しずか</sup>だけだから泊まっていくな？」

静香の言葉が、僕の頭をぐるぐると回る。

「えと、もう一回言ってくれる？」

「私だけだから泊まっていけない？　っていったんだけど」なぜか頬を薄くだが赤くさせている。

両親に会いたくないから、いいかなあ。——あつ、魔力波<sup>まりよくは</sup>も偽装<sup>ぎざてう</sup>しておかないきや。

「お言葉に甘えさせてもらうね」

「ええ。……それで、食材の買い物に付き合ってくれない？」

「いいよ。じゃあ行こうか」泊めてくれるんだしそのぐらいしないとね、と心の中でつぶやく。

「うんっ！」

静香の家から、スーパーまでは歩いて5分と非常に近い。

「いつも、歩いてくるんだ？」

「ええ。ワープすればすぐに着くんだけど、体力が落ちるじゃない？」

雑談をしながら食材をカゴに入れていく。

「亜耶は、炭酸<sup>たんさん</sup>飲める？」

「ああ、うん大丈夫だよ」

「だったら……。サイダーをかうわ」と言いながらサイダーのペットボトルを取ってカゴに入れる。

「このぐらいかしら」

僕はレジでカードを出してそれを使って購入した。

静香に組織に入っていることをバラしたくないので、学校で出してい

るカードを出した。

ちなみに色はイエローだ。組織は、ブラックだけどほとんど使っていない。

「私が払ってもよかったのに」

「泊まってる僕がこのぐらしいしないかね」

僕は、買ったものを亜空間に入れておく。

買い物が終わり、静香の家に向かつてる時の事だった。

「亜耶って組織に入ってるでしょ？」 静香の言葉に僕は驚いて思考が止まる。

「なっ……」

「入ってるんでしょ？」

おっと、思考がフリーズしていたよ。誤魔化してみようかな。

「いや、入ってないよ？」 あっ、声が……。

「ふーん」と静香は冷たい視線を僕に向けてくる。

ふと、後ろから気配がする。静香は気付いていないみたいだけど。

僕は立ち止まって、後ろを振り向いた。

「僕を尾行<sup>びこう</sup>してるなんて誰だ？」

「あ、亜耶？」 静香は急に僕が変わった事を驚いていた。

「気配を隠していたのに気付くとは、さすがはトップ3だ」と言つて、しかし一般人にバレるとはな、と鼻で笑われる。

僕はその挑発に乗らずに静香を守る。

「静香、逃げて」

「えっ。でも亜耶がっ！」

「僕は大丈夫。……だって、魔法組織のトップ3だから」ね、と静香に言う。

僕は静香を抱き寄せて、転移魔法を静香にかけてこの場所から逃げさせる。

――僕の戦いが始まった。

## おしらせ

3月11日に三陸沖で発生した観測史上最高 M9.0の地震により、とても執筆できる状況じゃありませんでした。

そのため今月予定していた、以下の作品を来月に延期します。

- ・ 神様をお願い
- ・ 僕と幼馴染と……僕は女の子じゃない！
- ・ 俺と紗耶香と世界！！

なお、地震前に投稿した「僕の現実逃避」と「異世界にdive！」の来月分はお休みします。

楽しみにしていた方には申し訳ありませんが、よろしく願いします。

字稼ぎ。

あ

## 15話

そろそろはじめようかな。

「さあ、始めようか楽しい遊戯ゆうぎを」

呆れたよ。戦闘狂バトルマニアだったなんて。

「ひょっはあ！」彼から焰弾が複数放たれる。

「戦うのは嫌いなんだけどなあ」僕はそう言いながら、左手で魔力弾を放ってそれを相殺させる。

マルチタスク複数思考を使って、家族に居場所がバレたことを悔やむ。

「君のせいで、僕の家出計画が台無しじゃないか。どう責任とってくれるの？」

彼の動きが止まって顔を真っ赤にさせる。

「――せ、せきにん？」

「そうだよ。親に居場所がバレちゃったんだから」

「いや、もう遅いが？」――この声で気付いた。

「と、とうさん？」

自分で言った言葉を理解した。父さんに見られたことを。

「いや、いやあああ！」僕のまわりに魔力弾を放つ。

魔力弾が炸裂して、辺りが光の奔流ほんりゅうに包まれた瞬間に、首に衝撃が加わって僕は気絶した。

気が付くと、自分の部屋に寝ていた。

僕は頭だけを動かして時刻を確認する。あれからまだ2時間しか経っていない。

しずか静香も待っている事だし戻りますか。

僕は起きあがって、階段を下りて玄関に向かおうとしたが途中で母

さんに会った。

「静香ちゃんのところに泊まるんでしょう？ 気を付けてね」と母さんは微笑んで部屋に戻った。

母さんが部屋に入った直後に父さんの悲鳴が聞こえたけれど僕は無視して静香の家にワープした。

僕はいったい何を間違えたのやら。ワープした場所はお風呂でした。

「あ、あや？」静香が入浴中でした。静香の肌って綺麗きれいだな。

「そ、そんなに……。見たいの？」顔を俯きながらも瞳は僕に向いている。

世間で言うところの上目遣いって、これのことなんだ。

「あ、うんっ！」

「そ、そうなんだ……」静香は顔を真っ赤にさせて、僕に背を向けた。

「ごめんねっ！」その言葉と同時に僕は逃げ出した。

## 16話

数分前の出来事だが、いまだに脳内に焼きついて鮮明に浮かんでいる。

きめ細かい肌。白くて白い肌。膨らんだ胸。

「よし、こういう時は深呼吸だ」

すう、はぁ、すう、はぁ。――よし、大分落ち着いたぞ。

「――上がった、よ」静香しずかがキャミソールを着て出てきた。

お風呂上りだから顔が上気していて、髪が数本だが顔の輪郭に付いている。

「あっ、うん。僕も入ってくるからっ！」僕が見つめていたことがバレないように急いで浴室に入る。

僕は服を脱いで――もちろん男の姿で――シャワーを浴びる。

この僕の身体をどうにかしないといけないな。一日6時間までは魔力を消費せずに男に戻れるが、それを過ぎると魔力を消費しないといけないのだ。

戦闘時の時は時間内の時はそのままで戦うが、時間外の時は女の姿で戦わなくてはならない。

「いつまでこんな生活が続くのかなあ……」

待てよ。これって僕自身が原因なんだよなあ。

## 16話（後書き）

すみません。。



## 17話

お風呂から上がった僕はなぜか女の姿に戻っていた。

「なんで……。魔力はまだあるのに!？」

僕の頭にはたった一つの原因が思い浮かぶ。――急いで窓から空を見た。

「忘れてた。今日は”新月”だった」新月になると魔力が半分になるのだ。――その魔力は地球の修復などに使われている。

「亜<sup>あや</sup>耶。はい、着替え」静<sup>しずか</sup>香が僕に着替えを持ってきてくれた。

「ありがとう」

着てから気付いたのだが”女物の服”だった。

「そっちの方が似合うでしょ」

「僕は男だよっ!」

「今は”女の子”でしょ」

たしかに女だけど、こっちにだってプライドというものがある。

この戦は負けられない!

自分の持ってきたバックから男物の服を取り着る準備をするが、

「ダメ、よ」

静香に服を奪われた。

女の姿になるとそれ相応の筋力になってしまうのでいつもは強化魔法を掛けているのだが、今日は魔法が使えなくなる日だ。

「放して」

「嫌よ。だって可愛いのに台無しじゃない」静かは呆れた表情を浮かべながら僕を見ている。

「第一に僕は男だから! 男に可愛いは必要ないからっ!」

「さっき言ったじゃない……。亜<sup>あや</sup>耶は女の子なのっ!」

その直後、僕の首に衝撃が走り意識を失った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7293k/>

---

僕の現実逃避

2011年10月9日19時30分発行